

# 第一回平成 17 年度関東地域アライグマ防除モデル事業調査検討会議事概要

日時：平成 18 年 3 月 16 日（木）13:30～16:30

場所：万国橋会議センター 304 号室

出席者

< 委員 >

池田 透（北海道大学助教授）  
石井 信夫（東京女子大学教授）  
金田 正人（生物多様性 JAPAN、三浦半島自然誌研究会）  
羽山 伸一（日本獣医畜産大学助教授）  
山口 千津子（日本動物福祉協会動物担当）

< 関係機関 >

農林水産省関東農政局  
神奈川県環境農政部緑政課  
葉山町福祉環境部環境課  
相模原市環境保全部みどり対策課  
東京都環境局自然環境部計画課  
東京都環境局多摩環境事務所自然環境課  
町田市環境・産業部農業振興課

< 事務局 >

環境省自然環境局野生生物課  
関東地方環境事務所野生生物課  
( 株 ) 野生動物保護管理事務所

欠席者： 安藤 元一委員（東京農業大学助教授）  
東京都産業労働局農林水産部食料安全室

## 議事概要

検討会設置要領について説明：3 月 16 日付で施行

座長選出：石井委員を選出

ワーキンググループの設置を決定 年度明けに招集

議事録は公開

## <関東地域アライグマ防除モデル事業について>

資料1でモデル事業の内容について説明。

委員・関係機関からの主な意見等（・意見質問、事務局回答、委員発言）

- ・ 山梨県についての調査方法はどのようにするのか。  
行政資料あるいは市町村単位のアンケート調査、聞き取り調査を通じ生息分布を調べる。被害情報については市町村への報告をまとめる。
- ・ 捕獲個体の分析予定はないのか。  
この事業で捕獲した個体については分析を予定している。有害鳥獣捕獲個体について分析予定はない。
- ・ 3年後の最終年度にマニュアルを作成する予定になっているが、それを待たずに検討会でまとめたデータはその都度公表していくべきである。  
検討会での成果はすぐに公開していく予定である（関東地方環境事務所のHPに掲載予定）。まとめたものができれば、それもあわせて公開していく予定である。
- ・ 広域的な防除計画の策定主体は何か。  
はっきりとは決定していない。国、県、市町村、民間団体が連携して当たらなければならぬ。各地域で体制は変わるだろう。モデル事業のなかでどのような体制が効率的か検討していく必要がある。
- ・ 関係部局の連携があまりうまくとれていないという現状がある。マニュアルを提示されたときに対応できるよう、市町村内部での調整を進めて欲しい。  
最終的な成果は広域的な防除計画とマニュアルになる。大きな達成目標としては、効果的な防除手法、地域間の連携をどのようにするかという点であり、具体的には高密度生息地域と分布域拡大地域での防除をどのように効果的に進めるかを検討していきたい。

## <分布調査結果概要について>

資料2でこれまでに集めた情報を説明。

委員・関係機関からの主な意見等（・意見質問、事務局回答、委員発言）

- ・ 表1の捕獲頭数については、被害後の申請を受けて捕獲された頭数であり、生息頭数とは違う点に注意すべきである。
- ・ 表中の平成13年度に静岡県で、前年に比べ著しく多い70頭捕獲されている理由は何か。  
理由は不明。転記ミスではない。
- ・ 分布調査予定地はどこを予定しているか。

神奈川・東京・山梨・千葉・埼玉・静岡東部を考えている。

- ・ 調査範囲内で一定精度の情報を収集する努力が必要。
- ・ アンケートの対象者はどのように考えているか。  
農協関係者、鳥獣保護員、公園の指導員等を考えている。
- ・ アンケートや聞き取りでは生息を正確に反映できない。広域に渡りカメラトラップや足跡トラップによって補足することが可能であるか。

どのくらいの密度でかける必要があるのかにもよるが、足跡トラップが有効かどうか検討した後、導入していく可能性もある。

- ・ 図2で、相模原市は多くのメッシュで生息が確認されているようだが、H17年度の聞き取り調査は相模原市付近で行われたものなのか。

東京農業大学で行われた調査では相模原市全域ではないが、相模原市広域と隣接する町田市の一一部において行われた。町田市全域は今年度別に実施した。神奈川県ではH12年度から行われているため情報が多く、隣接する町田市よりも多く見える点に注意が必要である。

- ・ 市民のなかで、ハクビシンやアナグマと混同している方もいる。どのように確認をとるのか。

今回はアライグマと断定できないものは採用しなかった。調査範囲が狭い場合は、カメラトラップや足跡トラップを併用するべきである。

- ・ 有害鳥獣捕獲許可が出ているところはなんらかの確認があるところなので、許可申請のデータを集めることで疑わしい地域がわかるのではないか。

種がわからない被害の場合、アナグマ・ハクビシン・アライグマ・タヌキは同時に申請する方が多いので、必ずしも生息と関係しない場合もある。またアライグマの捕獲数は、自治体の積極性・わなの設置場所なども関連している。(自治体からの回答)

- ・ 生息が疑わしい地域を削るのではなく、それを含めた最大値のデータも必要である。
- ・ 今後、関東地域のアライグマ分布拡大想定は重要であり、個体群増加と分布域拡大について、情報収集し具体的に詰めて欲しい。

#### <モデル地区における実証試験について>

資料3でモデル調査計画について説明。

#### 相模原・町田地域について委員・関係機関からの主な意見等

(・意見質問、 事務局回答、 委員発言)

- ・ エッグトラップはどの程度の苦痛を動物へ与えるのか  
今まで目立った外傷は見られない。腫れもほとんどない。
- ・ 麻酔薬による安楽死とあるが、注射によるのか吸入によるのか。また獣医師が行うのか。  
静脈注射による安楽死である。獣医師または獣医師の指導のもとに作業員が行う。
- ・ 麻酔薬による意識消失まで、どのような状況におかれるのか精神的な恐怖を含めて考  
える必要がある。

- ・ モデル事業から各自治体へ実施主体が変わったとき、獣医師が同じように安楽死を行えるのか。

今現在は自治体間でも処理方法がまちまちであり、すぐに統一するのは難しい。モデル事業として各自治体がどのようにしたらよいのかも検討していきたい。

- ・ 動物愛護管理法のなかでは、野生動物についての処分の基準がない。現在、日本獣医師会の野生動物委員会で基準をつくっている。米国獣医師会の基準を参考にしているが、アライグマについては炭酸ガス装置を転用できる吸入麻酔の吸入による処分が一番人道的かつ安全な方法ではないかと考えている。
- ・ よりすぐれた捕獲わなの選択において、効果検証はどのようにするのか。  
足跡トラップとカメラトラップにかかる頻度の変化により検証する。
- ・ 混獲を避けることを最優先にするのではなく、捕獲効率の高い方法を選択し、見回り頻度を高くすることで混獲に対応する方法はどうか。
- ・ 人工的に発情させたメスを使って誘引する手法はどうか。

発情期のメスにオスが寄ってくるのは事実であるので、なんらかの物質を発情メスから抽出することなどで誘引に使用できる可能性はある。発情期以外の季節での効果は不明である。

- ・ 北海道では餌として揚げパンとコーン菓子が捕獲効率がよい。撒き餌をすることでさらに効率が上がる。
- ・ どのような環境に設置したわなが捕獲効率がよいかを数量化して、各地域で保有しているデータを共有していくシステムを構築したほうがよい。
- ・ 北海道と関東での繁殖率に差があるのではないか。関東の個体数の増加はすさまじいので、1歳メスの繁殖率が高いのではないかと考えている。

鎌倉市に協力をしてもらい、捕獲個体の収集・分析をしている。1歳仔の収容が極端にすくないが、北海道に比べ産子数は多く、繁殖期間が長いことは明らかである。

- ・ 住民への周知についてどのように行うのか。

実際の捕獲の際は調査地域の住民の方に周知をしようと考えている。市全域を対象としたものではなく、関係自治会などへの説明会開催、回覧などを検討している。

#### 葉山地域について委員・関係機関からの主な意見等

(・意見質問、 事務局回答、 委員発言)

- ・ 行動圏把握はどの程度の成果を期待するのか。完全除去の際に発信機装着個体が仮に残ると排除できることを証明することになる。相当な覚悟が必要。
- ・ 行動圏を正確に把握するためには夜間の追跡調査になり、大変な作業量になる。
- ・ 鎌倉の追跡データを使用することは可能か。

24時間を5日、2ヶ月のデータであり、十分とは言えない。

- ・ 最適なワナ密度を考える場合、最大数の設置をしてそこから類推することも可能ではないか。

奄美のマングースの場合、ワナの密度を高くすればするほど効率はあがる。地

域からの排除を考えるならば、できるだけ多くのワナをかけるという手法は良いのではないか。

- ・ トウキョウサンショウウオの食害を考える場合、5月の発信機調査の必要性が疑問。